KONAN UNIVERSITY

僕たちが紐解く『魚崎』のキオク　ー震災を教訓にして　～『防コミ』の方々のお話～

著者	清原 孝重，石畠 幸治，明珍 信宏，中村 龍二，岡本 侑佳，野田 浩佑，甲南大学久保ゼミ，久保 はるか
雑誌名	「大学周辺地域の歴史を知る」シリーズ
巻	2
ページ	3-12
発行年	2018-03
URL	http://doi.org/10.14990/00003201

震災を教訓にして～『防コミ』の方々のお話～

防災福祉コミュニティ（防コミ）
清原孝重会長
石畠幸治副会長
明珍信宏副会長

魚崎町防災福祉コミュニティとは？

魚崎小学校区及び福池小学校区の一部を担当地域として地域防災、地域福祉の充実をはかり、安全で安心して暮らせる地域社会を実現することを目的として活動している団体です。また、福祉を取り入れた防災訓練をするなどして、今後三〇年以内に起こると言われている東南海地震に向けて対策を重ねています。

（「にぎわいネット」ホームページより）

一．震災時の活動について

〈Aさんの場合〉

震災当時、まだ防災福祉コミュニティはできていなかったので、組織としては動いていませんでした。災害時には行政機能が麻痺してしまいます。そこで神戸市が作ったのが防災福祉コミュニティ制度で、魚崎では平成九年に魚崎町防災福祉コミュニティが作られました。したがって震災時にどのような活動をしたかというより、個人個人がどのような立場で何をしたのか、という話になると思います。私の場合、家が全壊しましたから、近所の人と助け合ったという話をまずしたいと思います。地域を見渡してみると多くの家が倒壊していました。その中で「おばあちゃんがこの家の下敷きになっている」と助けを求める娘さんがいたので、我々は素手で救出に当たりました。それが魚崎南町三丁目の自治会エリア。私は当時から自治会の会長を務めていたので、皆を集めて救出に携わりました。結果的に魚崎南町三丁目で四人の方が亡くなりました……。

また、避難所の運営にも携わりました。我々はそれまで、まさか神戸にあのような災害が来るとは思っていなかったので、何の準備もしていないし何より心の準備ができていなかったと思います。これからどうなるのかな、

と思いながらとりあえず避難所の運営を五百地公園で始めました。そこで皆で簡単な食事を作ったり、日にちが経ってからは、区役所の方へ救援物資の要請や物資の配布をするなどのお世話をしていました。しばらくすると自衛隊の方が到着して、近所のガレージに駐在し食糧支援をしてくださいました。四〇〇人分の温かいご飯を四〇～五〇分間で炊ける炊飯道具を持って来て、我々に温かいご飯を提供してくれました。皆さん、お腹が満足すると気持ち的には落ち着いてきたのですが、今後どうなるのだろうかということを心配しながら日常生活を送っていました。公園には、家が潰れてしまったため、テントを張って生活している人もいましたね。

〈Bさんの場合〉

地震が起きたのは、私がちょうど会社に行くために起きようとした時でした。気が付くと、隣の家が倒壊して、二階部分が私の家の一階にもたれかかっているような状態になっていました。当時、朝日はまだ昇っていなくて少し薄暗い状況でしたが、徐々に明るくなると、南側の道路から北側へ倒れ込んでいるような状態の家々が見えました。今思い起こすとおかしいことかもしれませんが、そのような状況にもかかわらず、私は会社に行かなければならないと思っていました。私は建設現場の所長をしていましたので、地震が起きた後に自分の現場の建物がどうなっているのかということが気になって気になって。家族が安全なのは分かっていたので、背広を着て、なんとか阪神の魚崎駅まで辿り着いて、駅の二階に上がったのですが、電車が一向に来ませんでした。しばらくして一〇人くらい背広を着た人が来ました。私と同じように仕事に行こうとしていたのでしょうね、「電車来ないですよね」なんて話をレールの先を見ながらしていました。どれだけ待っても電車が来ないので、私は一旦家に帰り、その時に初めて我に返ったような状態でした。

それからまず、近所の女性・子どもを避難所の魚崎小学校に連れて行きました。その後近所に戻り、今度はそこで救助活動を行いました。救助活動では、少しだけ顔見知りの人に「埋まっている人がいて、まだ顔も見てへんねんけど、この倒壊した家の下敷きになっている可能性があるから手伝ってくれ」と声をかけられました。それまではご近所付き合いなんてほとんどありませんでしたから、近所の人とも顔見知りではなくて、このように声をかけられたところから救助活動を通じて関わりが始まるような状態でした。

一日目は八時くらいから救助活動を始めて、三軒ほどの倒壊した家から救助しました。そのうち二人は倒壊した家の下敷きになって亡くなっていて、もう一人は足を怪我していましたが何とか助かりました。二日目以降は、魚崎小学校に行って救助活動・避難所運営のお手伝いをしていました。避難所運営のお手伝いというと、救援物資を受け入れたり、それを配ったり、避難している人の健康状態を気遣ったりすることなどが思い浮かびますが、実際に一番の問題はトイレが使えなくなったことでした。「水が流れないから避難所のトイレが使えへん」と。当時は今の小学校のように洋式便所がなく和式便所だったので、便がいっぱい溜まっていて、男子便所も女子便所も同じ状態でした。それでも大人たちは理解して我慢しながら排便するのですが、子どもがやはり汚い所でしたくないと言いました。だから何人かで声をかけ合って便を柄杓で取り、汲んだ湧水を引っ張ってきて流してトイレを洗うボランティアをしました。

加えて学校に送られてきた衣服などの救援物資を配る作業をしました。衣類の箱には新しいものも古いものも混在して入っていました。当時一番困ったのは、下着などが十分に行き届いていなかったことです。もう一つは、まだ離乳食まで達していない小さな赤ちゃんがおられる家庭に、幼児用のスキムミルクが行き渡らなかったことです。お母さんの母乳が出なかったらミルクを飲ませる必要があります。そこで、必要なものを必要な人のところから順番に分けて与えることを心がけました。そのような仕事を避難所で手伝い、それを避難所が解散する七月までずっと続けていました。最初の一か月はずっと避難所にいたので、会社には休みをいただいて手伝っていました。それ以降は会社に行きながら朝と夜に手伝って、休みがあればまた手伝うという状態で過ごしていました。そのような形で震災が起こった時は対応させてもらいました。

〈Cさんの場合〉

私が住んでいた町内の住民は、約九〇%がマンション住まいです。地震があった時、私が寝ている部屋には大きなタンスが三つあったのですが、それがすごく揺れているのが分かった時に、隣に妻が寝ていたので倒れたら大変なことになると思い、必死に押さえました。押さえていたら、自分の体がタンスと一緒に飛んでいくような感覚でした。その後落ち着いてから部屋を出てみると妻はテーブルの下に逃げていました。

ベランダのカーテンを開けてみると、南側にある剣菱さんの酒蔵の屋根がなくなっているのが見えました。そこでひとまず外に出て剣菱さんの酒蔵に行き、救出作業を手伝いました。ちょうどその頃剣菱さんには酒造りに入っている杜氏さんが一五人いたのですが、なんとか一五人全員無事で良かった良かったと自分のマンションに戻ってみると、入り口のエントランスに二Mほど砂が溜まっていて、下に空洞ができていました。今で言う液状化現象です。

帰り際に母親の家に立ち寄ったところ、住んでいた長屋が壊滅状態で瓦礫と化していて、周りの人は揃って諦めたような顔をしていました。これで「母親は死んだんやな」と思いながら、一生懸命瓦礫の下に行って母親の名前を呼んでいると、そこの自治会長さんが「ここに君の母親おるぞ」と助けてくれていました。何故助かったと言いますと、母親の上にちょうど仏壇が倒れてきたのですが、そこにテーブルがあったおかげで、その隙間に入って助かったみたいです。ひとまず母親を病院に連れて行ったのですが、満員状態で「もううちでは診れません」と断られてしまいました。その後、とりあえず休ませるために母親を背負って魚崎小学校に行き、魚崎小学校の教室で母親を知っている人に預けました。私は当時子ども会の役員をしていたので、役員さんの家を回ったところ、やはり多くの家が倒壊して、子ども会の会員さんたちの中で、三人のお子さんと一人のお母さんが亡くなったと聞きました。中町も、ほとんど救出にも行けないような壊滅状態で、夕方には火災が発生し始めるような状況でした。

私はシステムエンジニアでしたので、三宮にある本社に行ってみると、そのビルも被害を受けていて、事務作業もできない状態でした。そのような中、社員全員に「社員は工場へ行くように」と指示が出ました。理由は、会社の方針で「地震があって被害に遭ったのは分かるけれど、家族が無事であれば皆工場へ行き、まずはうちが支払わなければならない方には支払う準備をする。それから、新しい商品が欲しい方には供給する」ということになったからです。いつまでも甘えていてはいけないと激が飛んで、全員で篠山の工場へ向かいました。その後は日曜日に魚崎に帰ってきて、自治会長と一緒に救援物資を配るなどの手伝いをしていました。平日になったら篠山へ戻るのですが、その時の移動手段としては、まず西宮北口駅まで歩いて行き、そこから阪急線に乗って大阪へ出て、大阪からJ

Rが動いていたのでJRで篠山へ行くというものでした。その時に感じたことは、阪神淡路大震災で被害を受けたほとんどの人は、リュックを背負ってスニーカーか運動靴を履いているのに対して、大阪に行ったら皆スーツ姿で、「何者や」という感じで見られたことです。ただ嬉しかったこともありました。散髪屋さんに行くと「大変だったね」と散髪を無料にしてくれたり、お風呂を貸してくれる散髪屋さんまであったので、人の有難みを感じました。働く世代が被災に遭うと家族を守ると同時に会社も守らなければならないので、それが非常に難しかったです。働き盛りの世代だと、災害に遭っても家族と離れ離れになってしまうことが多かったのです。

二、住民との繋がりによって助かったこと

例えば、倒壊している家屋の下敷きになっている人を助けるという話になれば、重機などが必要になりますが、私たちが持っているのはせいぜいバール程度でした。しかし、我々の住んでいる地域には解体業をやっている方がいらっしゃったので、「ここに人が埋まっているから手伝ってほしい」とお願いすると快く協力してくれました。三、四軒くらいは回った気がします。『気がする』というのはあの日自分が何をしたか覚えていないからです。一日四〇時間以上働いた気がします。今だったら救出する人に面識がないと「そんなの知らんわ」となるのかもしれませんが、当時は皆で助け合おうという精神が生まれていました。

震災時の住民関係を振り返ると、災害時の物資配りや、子どもたちの面倒を見ることにしても、顔のまったく知らない人同士でも、お互いに声をかけたら手助けをしてもらえるという有難みを知ることができました。例えば、一人で救助活動を二〇～三〇分も続けていると手に血が滲んできてしまいますので、三人くらいに声をかけます。家族を魚崎小学校へ届けようとしている方や、まだ高齢者でない方に、「救助したいから手伝ってくれへんか」と声をかければ手伝ってくれました。「ちょっと待ってな」と言うと本当に戻ってきてくれて、その救助活動を手伝ってくれました。だから、災害時の救助活動では人が困っている時、「手伝ってください」と声をかけることは重要だろうし、声をかけられた人がそれに応えるということが、一番頼もしく思えた経験です。

他にも、ある地域での下宿学生の話があります。大学生が多く下宿していて、日頃はうるさいなあ、と思っていましたが、近所で家が倒壊したら真っ先に飛んできて救助を手伝ってくれました。また青木周辺に神戸商船大学の白鴎寮があり、かなりの人数の学生が生き埋めになったのを救出したという話も聞いたことがあります。

三、鳥取県江府町との関わり

およそ七〇年前、終戦間近の頃に、魚崎町の子どもと先生が二〇〇人くらい鳥取県江府町へ疎開しました。それをご縁に、戦後、江府町と魚崎町で交流が始まりました。阪神淡路大震災があってからさらに交流が深まり、平成一二年に江府町と魚崎町協議会とで姉妹盟約を結んでいます。平成二五年には災害時の応援協定を江府町と結びました。これは東日本大震災で福島第一原子力発電所があのような事故を起こしたことを鑑みて、江府町の北側の方にも原子力発電所があるので、地震があった時には魚崎へ避難できるよう決めておこうという趣旨でできた協定です。魚崎町協議会で、毎年ではありませんが江府町との交流は行われています。

四、魚崎町防災福祉コミュニティの活動について

魚崎町防災福祉コミュニティ（防コミ）の活動では、東南海地震に備えてということで防災マップを作りました。阪神淡路大震災で我々が学んだことと言えば、自分一人では生きていけないということ、助け合うことが大事だということです。阪神淡路大震災を風化させないために、語り部等々で次の震災に備えようという活動をしています。最初に作ったマップは阪神淡路大震災を踏まえて作りましたので、地震があっても津波は想定していない。だから救助するのに何時間かけても助ければいいという想定で作られていました。ところが平成二三年に東日本大震災があり、地震の後に津波が来ることが分かったので、では魚崎の場合はどうなんだという話になりました。今度の南海トラフ地震が発生した時に、魚崎の場合だと約一一〇分後に津波が来ます。だから新たに地震と津波を想定したものに見直さなければならないということで、新しく防災マップを作りました。南海トラフの地震は今後三〇年以内に七〇％の確率で起こると言われています。明日起きるかもしれませんので、何をすべきかというのを防コミ

は考えています。

地震が起きたら逃げればいいというわけではなく、その準備ができているのかということが今一番の問題ではないかと思います。例えば障がい者の方が災害時に自力で逃げるのは困難ではないかと考え、我々はその方たちを『災害時要援護者』と呼ぼうと決めて、その人たちの支援をどうするのかということも、今回のマップには記載しております。やはりそこが魚崎町防コミの取り組みの中で一番重要な活動だろうと思います。

我々は手上げ方式を採っていて、要援護者の方々が自ら「私は災害時に自力で避難できません」と登録するように告知しています。そして一度個人情報を登録したら放っておくのではなくて、個人情報を頼りに登録者の安否確認をしています。年に一回、新規登録の募集をしますが、それと同時に要援護者の支援方法を検討することが重要だと考えています。例えば私たちの地域では、二月に餅つきをやるから、その餅を持って要援護者の登録をしている方の所を訪問して、お変わりありませんかと尋ねていきます。しかし年に一回の訪問では不十分だと考えたので、我々は民生委員に普段から目をかけてくださいとお願いしています。

防災と福祉とは両立していないと駄目でして、防災だけだと災害時要援護者を発見することもできませんし、どのような支援をしなければならないかも分かりません。災害時は何が起きるか分かりません。例えば今は元気だけど、ひょっとしたら地震のせいで骨折して動けなくなるかもしれない。だから要援護者というのはもっともっと幅広いものであると認識してほしいと思っています。

↑魚崎町防コミの津波防災マップ

五. 統括防災リーダーとは

正式名称は『地区統括防災リーダー』と言います。災害時、情報を収集して、地域住民を安全に避難できるように指示していく人を統括防災リーダーと呼びます。防コミ加入自治会が二〇あるので、各自治会がそれぞれの地区統括防災リーダーを決めています。防コミのメンバーが普段六〇人近くいるのですが、災害時に全員いるとは限りません。仕事に出て行っていたり、何かの下敷きになって動けないかもしれない。誰がリーダーかと言えば、候補者は、普段いる自治会会長や防コミのメンバーですが、災害時には健康であり防災の知識があって、かつ冷静な判断ができる人ならば、その人を地域のリーダーとして災害から皆を守るというような役割を与えます。これが統括防災リーダーという意味合いです。つまり魚崎地区では誰もがリーダーとなれます。リーダーになった者が皆をリードしながら安全確保へと向かう、そのような統括防災リーダーの育成も防コミの目的の一つです。

また災害が起こらなくても、防コミの一番の目的はまちづくりですので、住民同士の繋がりづくりに防コミが一役買えればいいなと思っています。災害時を想定しながら声かけができて、顔の見える関係が作ることが大事になってきます。そういうまちづくりが普段の生活の中にも必ず必要になります。要援護者や障がい者や体の不自由な高齢者がいれば声をかける。それは見回り活動にも繋がります。防コミには災害時を想定した目的があるけれど、災害時でなくても普段の付き合いから、新しい住民と古い住民が入り混じって、古い繋がりがなくても現在の生活において交われるということが、街の安心安全に繋がります。繋がりができた後に魚崎の歴史を知ってもらえたら、と思っています。

六. 魚崎町防災福祉コミュニティの担い手

震災時には、自治会がない地区がありました。自治会がないと行政とのパイプが通らず、行政に物申すこともできないことに加えて、救援物資も届かないという状態でした。災害時に、自治会がいかに大事かを身に染みて理解しました。それが震災後新しく自治会が作られた理由です。新しい自治会は自治会活動といっても最初は手探りの状態ですから、防災福祉コミュニティがあるから、防災を中心

に自治会活動を展開させよう、という理由で防災に熱心に取り組んでいます。そのような訳で防コミよりも後からできた自治会の方が動員力もあるし熱心です。

自治会の一番の問題は、役員の高齢化が進んでいるということです。また若い者にどう引き継ぐかが重要な課題で、それを解決するために中学生で構成されたジュニア防災チームを作りました。彼らは何年後かには成人していくので、その時まで我々がきちんとリーダー性を発揮できるように育てていかなければならない、と考えています。その中学生たちが将来どこに行くか分かりません。全国に散らばっていくかもしれません。ですが、災害は魚崎だけではなく全国のどこで起きるか分からないので、魚崎で学んだ知識や経験で家族や同僚の安全を守ったり、普段顔見知りでなくても地域住民の安全を守ったりできるような子どもたちになってほしいと願っています。その時の経験は体で覚えるとなかなか忘れないでしょう。だから防コミとしては、知識も大事ですがその経験が将来世代に役立つのでは、と思いジュニア防災の人にも参加してもらい、訓練を一生懸命行っています。こちらから役割を与えるのではなくて、子どもたちが自主的に防災について考えられるようになってほしいです。

七. 魚崎の好きなところ

人間関係です。阪神淡路大震災を経験して、何故魚崎がいいか改めて考えると、新旧住民の隔たりがあまりなくて、地域で人間付き合いがしやすいからだと思います。地域の中で一つの小学校、中学校しかないため、子どもたちが入学した時に知り合った保護者の方が中学校でも同じなので、その時に人間関係ができます。つまり一体感・連帯感を持てる人間関係が形成されます。私は、そういう人間関係が気さくなところが、魚崎の良いところの一つではないかなと思っています。

今は子どもや障がい者、高齢者の居場所作りなどについても防コミのメンバーの中で話し合っています。その成果の一つがオレンジリング、所謂認知症サポーターです。認知症のことを知ろうというのも、防コミの活動の一つになっています。防コミ自体に人間関係ができてきますと、皆は自分が住みやすい街にしたいので、色んなことに顔を突っ込んでいくようになります。逆に言えば周りの人から防コミに声をかけてもらったら、うちの会長さんは断れないので（笑）、ぜひ声をかけてもらいたいなと思います。要援護者の支援センターなど、私たちとの繋がりが薄かった所とも連携が取れるようになってきたというのが、近年の魚崎の強みの一つです。

八. 今後の魚崎をどのようにしていきたいか

一つのボランティア団体の目標として、安全で安心な街を作っていきたいと考えています。地域住民も含め皆で協力して、関係機関にも協力してもらい、安心安全なまちづくりのために頑張っていきたいなと。自分でできることは自分でやろうと考えています。

それから魚崎には自治会が二二あり、情報交換のできる場所が多いので、新しく入ってきた住民の方も違和感なしに輪に入ることができます。地元意識の強い、「昔からこの地域に住んでいるから偉いんだ」という人がいないことも良いところです。昔からある催しを何とか残していこうと考えていて、他の地域なら新しい住民は入りにくいかもしれませんが、魚崎であれば入りやすいことが特徴的です。そのような催しを通じて新旧の住民がもっと仲良くなってほしいなと思います。

取材日　二〇一七年　一一月一六日

↑左から明珍さん、清原さん、石畠さん